

国際医療支援活動に大きな関心

アフガン難民やタイへのボランティア活動

獨協医科大学の医学生10人が9月8日、城西病院を訪れ、「国際保健」をテーマに公益法人「茨城国際親善厚生財団（IIFF）」の行っている国際医療支援活動について学びました。

毎年、同大学4年生の公衆衛生学実習の一環として行っている学習で、「母子保健」、「産業保健」、「精神保健」など14のテーマを設定している中から、「国際保健」をテーマとし、千種雄一教授、大平修二教授とともに、国際医療支援活動を30年以上にわたって行っている「IIFF」から学ぼうと、開かれました。

講師は、アフガン難民支援を皮切りにタイ北部のゴールデン・トライアングル地域で活動してきた介護老人保健施設「すばる」の荒川邦江施設長と、アフガニスタン医師で日本に帰化したアマデアル・亜来春さんの2人が講師で、「IIFF」の国際医療支援活動やタイ、アフガニスタンの医療事情などについて講演しました。

荒川施設長は、看護師としてアフガン難民の医療救援活動、タイでの医療支援などの活動を説明。荒川施設長自身も長くアフガン難民の医療救援活動に従事し、パキスタンやアフガニスタンなどの活動を紹介。2004年から麻薬地帯の少数民族を自立に導くタイ王室が取り組んでいる「ドイトン・プロジェクト」との連携をはじめ、この国際医療支援活動が縁となって結城市とタイのメーサイ市が姉妹都市となり、両市の高校生の交流にまで発展している様子を語りました。

亜来春さんは、アフガニスタンを中心とした「IIFF」の活動実績などを紹介。引き続き、ソ連侵攻後のアフガニ

スタンの実情や医療状況などを詳しく解説しました。

荒川施設長は「異文化の中の日本人で、文化の違いをいやというほど感じました。戦争という状況には、絶句しました。今でもこうした地域があるということを頭の片隅に置いてほしい」と語り、亜来春さんは「アジアに春が来てほしいと、帰化した時に名前を付けました。アフガニスタンでは女性が10代で結婚し、妊婦や幼児の死亡率の高さにつながっている。戦争のために精神を病んでいる人が大勢いる」と語り、学生たちも異文化や医療支援に対してさまざまな質問をしていました。

平成27年9月9日



医学生が国際保健をテーマに学習



亜来春さん



荒川施設長

